

キエラン・イーガン (Kieran Egan) 著
『想像力を触発する教育——認知的道具を活かした授業づくり』

Imaginative Approach to Teaching
高屋景一・佐柳光代共訳、北大路書房、2010

訳者による紹介——イーガンの引用で綴る——
佐柳 光代

I. 本書全体の主旨と構成

A. 主旨

イーガンは本書で「教育についての新しい考え方と、教師がそれを日々の授業に取り入れるための具体的な方法」を紹介したいと述べている。(p.i)
(以下、引用にある下線は佐柳)

1. 新しい考え方＝知識を教える際に生徒にとって意味のあることを教えるべきだという主張

「授業の本質は意味 (meaning) に関わることでなければならない。・・・教育の秘訣は、事実や技能を人間の経験の意味と結びつけることである。」
(p.185)

「教育の計画は機械的にすべきものではない・・・すべて「目標」という用語は工業生産の過程から生れたものであり、人間的関係のなかで生れたものではない・・・人間的側面が改めて強調され、授業とは目標達成というよりは意味を伝える営みだと強調される」(p.188)

2. 知識を生徒にとって意味あるものにする方法

「感情と想像力を触発して意味を引き出す」(p.17)。

「知識を感情 (希望、不安、熱情、勇気、忍耐強さ、憎しみ、喜び、野望、意志) の脈絡のなかで教える」(p.i)

「われわれは感情を動かされる時に物事の意味を知る。」(p.74)

「知識に命を吹き込み生徒の心 (mind) に届けるには、知識を人間の感情に結びつけて示さなければならない。そのときにこそ、知識は最も意味深いものになる。そしてこれを可能にする最良の道具が想像力である。」(p.2)

3. この方法の底に流れる原理

「知識はすべて人間的な源から生れたものだ」(p.i)

「知識は誰かがなんらかの理由で発明したり発見したりしたのだから、その人の想像力と感情が関わる」(p.i)。

知識に意味をもたらすものは知識の源となった人の感情であり、「これらを前面に出すなら、学習で生徒の想像力を触発することになる。」(p.88)

4. 想像力と感情を触発するための認知的道具

「認知的道具を獲得することが生徒の発達を促進すると考える新しい教育発達理論に基づく」(p.6)

「ロシアの心理学者ヴィゴツキーの理論に依拠している。ヴィゴツキーによれば、知性の発達は、人が生活する社会のなかで拾い上げるさまざまな認知的道具によってうながされる。」(p.vi)

5. 認知的道具獲得の段階

イーガンによる3つの段階

- ① 道具「話し言葉」獲得の段階（幼稚園くらいから小学校低学年）
- ② 道具「読み書き能力」獲得の段階（小学生中学年から中学生）
- ③ 道具「理論的思考」獲得の段階（高校生以上）

これら3つの段階については、イーガン独特の考え方がある。人間は「読み書き能力」の獲得前と獲得後では、思考に大きな変化があるという。また、イーガンはこれら3つの段階のほかに、「身体的理解」「アイロニー的理解」の段階も考えているが、学校教育を中心とする本書では取り上げられていない。詳しくはイーガン著の*The Educated Mind*（1977）を参照のこと。

6. まとめ

知識を生徒にとって意味あるものとして伝える。知識が生れてきた源を探り、その源にある感情を触発して教えると知識は生徒にとって意味あるものとなる。感情や想像力を触発するための認知的道具を提案する。

目次に掲載されているような認知的道具を使って、想像力と感情を触発し、知識を生徒にとって意味あるものとして伝える授業をしよう、とイーガンは提唱する。

「本書に展開される教育方法、つまり想像力を触発する教育方法が目的とするのは、一連の重要な文化的道具（ヴィゴツキーによれば言語、数と数え方、代数記号など。その他、人類が成し遂げた業績、発明、発見の文化的蓄積）を最大限に活用し、生徒1人1人が自分専用の認知的道具として使えるようにすることである。」（p.14）

B. 本書の構成（目次の紹介）後記

認知的道具と道具を使った授業例

II. イーガンの目指す人間像——イーガンにとって精神（mind）とは何か

「教育の仕事は、古い知識に新しい命と意味を吹き込めるように新しい世代の精神（mind）を導くことである。」（p.87）

ここで、イーガンは“mind”の語で何を意味しているのか。研究社の辞書を引くと

- 「①（身体と区別して、思考・感覚・感情・意志などの働きをする）心、精神
②（感情・意志と区別して、理性を働かせる）知性：知力、頭
⑤（心の持ち主としての）人間、人」

とある。イーガンはこのなかの、どの意味で“mind”を使っているのかを知るために、まず、イーガンの教育上重視する項目を挙げて探ってみる。

1. 知性

「ヴィゴツキーによれば、知性の発達（intellectual development）は、人が生活する社会のなかで広い挙げるさまざまな認知的道具によってうながされる。」（前出 p.iv）

「これらの認知的道具は一方で、カリキュラム上の知識を生徒の想像力に結びつけ、他方で生徒の脳の総合的能力を強める。想像力を伸ばすことがもたらす利点の1つは、思考の柔軟性、創造性、活力が増すことである。」(p.14)

2. 感情

「感情は鍵となる要素である。・・・よい教育を行うためには、生徒の感情が触発されなくてはならない。知識に命を吹き込み生徒の心に届けるには、知識を人間の感情に結びつけて示さなければならない。」(p.2)

「デイヴィッド・クレッチの有名な言葉によれば・・・人間というものは、「知覚し感じ考える」ことを同時に行う存在である。・・・生徒は学習する時、ただ頭で考えるだけではない。もし授業を最も効果的なものにしたいのなら、生徒が感覚と感情をもつ人間だということを心に留め、その感覚と感情を触発する必要がある。」(p.81)

3. 行動、倫理

授業で「経験の極端な事例」とか「現実世界の限界」に時折触れることにより、生徒は「可能性の限界を知って適切な標準と規範がわかる・・・生徒の獲得した新しい知識はまさに日常生活に対処する力を与える」(p.78)

認知的道具「反抗と理想主義」は、「自分が体験している現実よりどこか優れている世界や状況を想像する能力であり、自分の理想の実現を妨げている大人の世界の姿を認識する能力であり、それに反抗する能力でもある。」(p.92)

「もしテーマがウナギであれば、経済発展志向と相容れない環境問題に簡単にでも触れて、その生育環境への脅威に注意を向ける。・・・現在のわれわれにも責任がある利害の対立として取り上げることになる。生育環境の破壊を残念に思うだけではもはや十分ではない。欲しいと思うiPodやコンピュータなどが環境破壊の犠牲のうえに作られていることを生徒は認識しなければならない。つまり主体的に行動する自覚が高まれば、理論的にももの考える生徒にとって、これらの利害の対立は、自分とは関係の無い「あちら側」のこととして自分を「よい者」の側に簡単に立たせるものではなくなる。対立は1人1人の人間のなかにあると理解されるようになる。」(p.96)

「主体的行為者としての自覚」により、「抽象的に言い表されるさまざまな仕組みが存在し、世界を理解するためにはそれらが重要であると認識し始めるにつれて・・・このような仕組みのなかで果たすべき役割をもつ自分自身を意識し始める。「自分自身」もさまざまな仕組みの一部であると意識し始める。彼は自分が誰であるかを——過去に起こったことの結果であり、歴史的過程の一部として——次第に理解する。・・・理論的思考がさらに深まるにつれて、社会、歴史、政治そして家族の仕組みのなかで主体的に行動するものとしての自分自身についての意識も深まっていく。」(p.139)

「理論的思考に一体どんな価値があるのか？ それは思考の材料をうまく操ることのできるような大きな力を彼らに与える思考様式だからである。理論的思考は考える能力を大きく伸ばし、彼らが学習してきた多様な事柄を新たな体系に組み入れることを可能にする。この思考はまた柔軟性を生み出し、

彼らが法則性を探究し、本質を求め、また最も典型的には理論を構築することをうながす。この認知的道具をもつ人には、世界に対して実践的な力が与えられる。」(p.148)

4. 共同体に生きる

「誰も1人で話すことを学ぶのではない——読み書き、理論的思考についても同じことがいえる。われわれは1人1人ユニークな脳をもっている。しかし、われわれの精神 (mind) は共同生活のなかで共有されているあらゆるものから成り立っていて、その共有物は共同体のなかで生活し学ぶことによるのみ、われわれに伝えられるものである。このような共同生活から最初に話し言葉を、次に読み書きを、そしてさらに理論的思考を獲得するのであるが、その時、われわれは最も有効な働きをする3つの道具セットを文化の宝庫から取り出すことになる。」(p.14)

「理論的思考を続けていくには理論を導いてくれる共同体を必要としている。」(p.148)

5. まとめ

「理性はたんなる演算技能のセットではない。精神 (mind) は全体として働き、われわれの肉体、感情、想像力のすべてを含む。」(p.90)

つまり、イーガンが「精神 (mind)」と言うとき、それは辞書にある①②⑤の意味のどれでもなく、肉体を含んだ人間の全存在だと言える。それは、感じ、考え、行動する人間だと言えるのではないか。また、この人間は、1人1人ばらばらに孤立して生きるのではなく、共同体のなかで学びあう存在である。

III. イーガンの教育論に見られるその他の特徴

1. すべての子どもを対象とする

「マーガレット・ドナルドソンは論理的技術を[脱文脈的なもの]とよび、早いうちにこれに習熟することができる少数の子どもたちがその他多数の子どもを差し置いて優遇されてきたという。・・・ロバート・コールズも次のように言っている。[ナラティブは誰もが心の底に持っている能力である。それだけでなく誰にでも差別なく与えられていて、他者と共有できるものである。]」(p.91)

2. 科学と数学の学習に対する取り組みが改善される

「私が勧めている授業方法の目的は、どんな事柄を学ぶ際にもすべての生徒の想像力を触発することであり、その結果、学んだことが意味をもち感情に訴えるようにすることである。・・・(その) 結果の1つとして、科学と数学の学習に対する取り組み方 (および運用能力) が改善されると思う。人間の知識探究にとって重要な理数系の分野に、広い範囲の生徒を惹きつけることになるだろう」(p.150)

3. 世界の素晴らしさを知る

重要なのは実利的な目的ではなく「世界についての理解を豊かにし、世界の素晴らしさを知る」(p.42)

「知識の宝庫がもたらす大きな喜びと力を自分のものにする」(p.5)

「本書では、生徒の現在および未来を豊かにするために、この素晴らしい文化的道具を使いこなせるように生徒に教える」(p.vii)

III. 提案 (佐柳光代)

1. 自分の授業を振り返り、ここに挙げられた認知的道具で何か使ったものがあるかを省みる。
2. 授業計画のなかで、意識して認知的道具を使うことを試してみる。
3. 授業をお話しとして語ることがイーガンによって提案されているが、誰にでもすぐできることではないようにも思われる。そこで、よく書かれている絵本を使うことを提案したい。小学校のカリキュラムにある学習項目のすべてについて、絵本のリストを作ったらどうだろうか。また、高学年、中高生であれば、よい伝記を参考書として挙げるのもいいと思う。また、そのリストを作って、お互いにシェアしあうのはどうだろうか。イーガンの教育研究グループが行っているように、インターネット上で情報の交換をしたらどうだろうか。
4. この認知的道具を意識したカリキュラムが、各教科についてできないだろうか。

『想像力を触発する教育

認知的道具を活かした授業づくり』

キエラン・イーガン 著
高屋景一 / 佐柳光代 訳

目次

謝辞

日本語版出版に寄せて

凡例

はじめに

想像力は足下に

授業への新しい取り組み

学習の小史

言語と文字

理論的思考

授業ガイド

本書の見取り図

第I章

話し言葉ための道具

認知的道具

物語

比喻

対概念

韻、リズム、パターン

冗談とユーモア

イメージ

ゴシップ

ごっこ遊び

謎の認識

読み書き能力のための道具—萌芽段階

授業実施例

授業ガイド —簡略篇—

話し言葉のための授業ガイド（簡略篇）

実施例1：位取り

実施例2：蝶の変態

授業ガイド —詳細篇—

話し言葉のための授業ガイド（さらに役に立つ詳細篇）

実施例3：空気の性質

実施例4：同音異義語

実施例5：熱

第II章

読み書き能力のための道具

認知的道具

現実感覚

経験の極端な事例と現実世界の限界

英雄とのつながり

驚きの感覚

コレクションとホビー

知識と人間的意味

ナラティブによる理解

反抗と理想主義

学習脈絡の変換

読み書きから生れる眼

理論的思考のための道具—萌芽段階

授業実施例

授業ガイド —簡略篇—

書き言葉のための授業ガイド（簡略篇）

実施例1：産業革命（13歳～15歳向け）

実施例2：ピタゴラスの定理（12～14歳向け）

授業ガイド —詳細篇—

書き言葉のための授業ガイド（さらに役立つ詳細篇）

実施例3：平行線に交わる直線がつくる対角は等しい（8歳～15歳向け）

実施例4：冷血脊椎動物の生活史（8歳～10歳向け）

実施例5：樹木（12歳～15歳向け）

第III章

理論的思考のための道具

認知的道具

抽象的現実の感覚

主体的行為者としての感覚

一般的概念と変則的事実の把握

権威と真理の追究

メタ・ナラティブによる理解

まとめ

授業実施例

授業計画ガイド ー開花期ー

理論的思考のための授業ガイド

実施例1：さまざまな革命

実施例2：微積分学（16歳～20歳向け）

実施例3：ハムレット

実施例4：単振動（16歳～18歳向け）

..

おわりに——日々の授業に想像力を

用語集

参考文献

解説

索引